

クリスマスとキリスト教

カトリックセンター 松村 良祐

キリストの誕生を祝うクリスマスが12月25日とされたのは、4世紀のことであるが、キリストが実際に生まれた日があるのかどうかは定かではない。当時用いられていたユリウス暦の暦で12月25日は冬至に当たり、太陽神を崇拝するローマ土着のミトラ教にとって、冬至は太陽が新しく生まれ変わる日であった。キリスト教はこの考えを習合し、冬至の日をキリストの誕生日として祝うように定めたのであるが、一年で最も夜が長いこの日を過ぎると、日照時間は再び少しずつ長くなっていくから、この点に闇に満ちた世界に光をもたらす救い主としてのイメージを重ね合わせたのかも知れない(「マラキ書」4.2)。

もっとも、クリスマスは当時の人々の内にすぐさま定着したわけではない。3世紀の神学者オリゲネスは、受難日、イースター、ペンテコステの3つを教会の主だった主日に数え、その異教起源を嫌ってか、誕生日を祝うことを巡って

「全ての聖なる人の中で、自分やその子供の誕生日に祝宴や宴会を催したと記録されている人はいない。(ヘロデやエジプトのファラオのような)罪人だけが誕生の日に喜びの宴を催す」(『レビ記講話』8, 3,(2))と述べている。クリスマスが人々の生活の内に根を下ろすようになるのはオリゲネスより数世紀後のことである。

しかしながら、こうしたオリゲネスの批判の可否は別として、キリストの誕生はその教えが世界を明るく照らし出すものである限りで「よき知らせ」であり、その実現はそれを受ける個々人の手に委ねられている。「キリストが1000回ベツレヘムに生まれても、あなたの中でなければ、永遠に無意味である(『シレジウス瞑想詩集』1, 61)」。イエスによってもたらされた福音の光が自己の内に、そして、世界に僅かでも明かりを灯すことを祈りたい。



「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」

(ヨハネ 15章5節)

待降節について

12月25日の降誕祭の四つ前の日曜日から、降誕祭の前の準備季節である待降節が始まります。

常緑樹の枝を輪にして、四本のローソクを立て、四週間の心の準備をします。悔い改めから回心、そして近づいた降誕の喜びの心へと準備します。

第一の日曜日には濃い紫色(悔い改めと償い)のローソク、第二の日曜日には薄紫(希望)、第三の日曜日には桃色(喜び)、最後の第四の日曜日には白(イエス・キリストを象徴)のローソクを点します。

悔い改めと新しい心で世を照らしてくださる主イエスの降誕を待ちながら、四本のローソクを順番に一週間に一本ずつ点けていきます。



聖書のことば：

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

(ルカ 2章10・11節)



教皇フランシスコのTwitterから



Pope Francis [@Pontifex](#)

May Mary's pure and simple smile be a source of joy for each one of us as we face life's difficulties.

When we encounter others, do we bring them the warmth of charity or do we stay closed up and warm only ourselves before our fireplace?

Poverty is not an accident. It has causes that must be recognized and removed for the good of so many of our brothers and sisters.

We cannot change the world alone, but together we can spread the joy of the Gospel by staying close to those most in need.

Nothing and nobody can block the light that Christ puts in our hearts and on the face of His friends.

私のクリスマスの思い出

英語文化学科 2年 角谷海音

私のクリスマスの思い出を2つ紹介します。1つ目は、中学校で行われた“守護の天使”です。12月初め、クラスの皆がクラスメートの誰かの名前が書かれたくじを引き、その日からクリスマスまで、自分がその人の“天使”になります。その人が困っていないか見守り、手助けなどをするのが天使の役目です。同時に自分も誰かから見守られていると思うと面白かったです。そして終業式には種明かし。全員が一斉に天使になった相手にクリスマスカードを渡します。その時はクラス中が大盛り上がりでした。

2つ目は、13歳のクリスマスです。私は初めて教会に足を運びました。雪の積もる中、祖母と2人で祖母の所属する教会へ向かいました。教会の中へ一歩足を踏み入れると、あちらこちらから聞こえる「クリスマスおめでとございます」という、当時の私には少し聞き慣れない挨拶。玄関で見知らぬおばさんから笑顔で出迎えられ、一瞬のうちに心が暖かくなりました。そしてミサにあずかり、ろうそくの香りや祈りの言葉、神聖な雰囲気や教会に響く綺麗な聖歌に感動し、胸がいっぱいになりました。クリスマスは相手の幸せを思う、平和に満ちた日なのだとことを体感しました。

私が今、私の友達や藤の学生みんなにおすすめしたい12月の過ごし方は、クリスマスに向けて、心の準備をすることです。いつもより周りの人に目を向け、自分が幸せを感じている今、辛い思いをしている誰かに心を向けます。そうする事で、今の自分と、今年一年の自分を振り返る事も、自分の行動を改めることもできます。雪も積もり、街もクリスマスモードでにぎやかになりました。クリスマスに向けて多くの人が落ち着いて待降節を過ごせますように。

マリア院のクリスマス・ミサの時間

札幌マリア院のクリスマスのミサは、12月24日 **19:00**です。どなたでもどうぞお越しください。

12月25日**朝7時**から、修道院らしいミサがあります。どうぞ。



学生ボランティアの募集

カトリックセンターでは、学生の有志にも協力していただく方針で、ボランティアを募集しています。カトリック信徒であるかどうかに関わらず、どなたでもどうぞ。

- *クリスマス・ミサや卒業ミサのお手伝い
- *聖歌隊をつくって儀式（ミサを含む）で聖歌を歌う
- *学内の宗教的飾りつけ（クリスマス期）など

関心がある方は、北16条の学生は学生課の鷺足まで、花川の学生は人間生活学科の Sr.木村までお申し出ください。